



Title	本特集について
Author(s)	宇野田, 尚哉
Citation	越境文化研究イニシアティブ論集. 2020, 3, p. 7-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75554
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【特集 1】

詩人金時鐘生誕 90 年・渡日 70 年記念 シンポジウム記録

本特集について

宇野田 尚哉

1

本特集は、2019 年 6 月 16 日に大阪大学中之島センター佐治敬三メモリアルホールにおいて開催した国際シンポジウム「越境する言葉—詩人金時鐘さんの生誕 90 年と渡日 70 年を記念して—」の記録である。主催者は越境文化研究イニシアティブで、大阪文学学校、藤原書店、朝日新聞社の後援を受けた。

この国際シンポジウムを開催するにいたる背景としては、次のような 2 つの文脈があった。1 つは、グローバル日本研究クラスターの時期以来、在日文学に関心を抱いている北米の日本研究者のグループと宇野田が研究交流を持ってきたという文脈である。私としては、そのうちのどなたかに登壇していただける国際シンポジウムをいずれは大阪で開催したいと考えていた。もう 1 つは、越境文化研究イニシアティブを立ち上げる際に新たに加わっていただいた細見和之氏と私がともに現在藤原書店から刊行中の「金時鐘コレクション」全 12 巻の編集委員をつとめており、もう一人の編集委員浅見洋子氏も交えて金時鐘さんの生誕 90 年・渡日 70 年を記念するシンポジウムを開催することはできないかと相談していたという文脈である。本国際シンポジウムは、この 2 つの文脈が交わったところで企画された。開催時期が 6 月になったのは、CATHERINE RYU 氏が日本に研究滞在しておられた時期にあわせたからであるが、6 月は奇しくも 70 年前の 1949 年に済州島 4・3 事件後の政治的抑圧を逃れて金時鐘さんが日本に「密航」(亡命)してこられた月でもあった。

7

まずは詩人金時鐘について略述しておこう。

金時鐘は、1929年に釜山で生まれ、植民地支配下の済州島で皇国少年として育った。解放後民族に目覚め、左派の運動に身を投じ、朝鮮半島の分断を固定化すると考えられた南朝鮮単独選挙を阻止することを意図した済州島4・3蜂起に南朝鮮労働党の末端黨員として関わり、追われる身となった。3万人をこえる島民が犠牲になったとされる過剰な武力鎮圧のなか、金時鐘が日本に「密航」（亡命）してきたのは、前述の通り1949年6月のことである。

渡日後、金時鐘は、左派の民族運動に身を投じる一方、詩人小野十三郎との関わりなどのなかで本格的に日本語での詩作を始めていく。第1詩集『地平線』（1955年）・第2詩集『日本風土記』（1958年）はこの時期の詩集である。その後、左派民族組織との政治的軋轢に起因する長い沈黙を経て第3詩集『新潟』を刊行するのが1970年のことで、この時期以後、金時鐘は、小野十三郎が校長をつとめる大阪文学学校を拠点としながら、詩作と評論の両面で旺盛に活動し、高い評価を受けることになる。この時期以後の詩集・評論集等の刊行歴と受賞歴を略述しておく、詩集としては、『猪飼野詩集』（1978年）、『光州詩片』（1983年）、『集成詩集 原野の詩』（1991年、小熊秀雄賞）、『化石の夏』（1998年）、『失くした季節』（2010年、高見順賞）、『背中の地図』（2018年）があり、評論集等としては、『さらされるものとさらすものと』（1975年）、『クレメンタインの歌』（1980年）、『在日はざまで』（1986年、毎日出版文化賞）、『草むらの時』（1997年）、『わが生と詩』（2004年）、『朝鮮と日本に生きる』（2015年、大佛次郎賞）がある。さらに、詩集・評論集とは異なる系列の仕事として、『尹東柱詩集 空と風と星と詩』（2004年）、『再訳朝鮮詩集』（2007年）などの訳詩集もある。現在、藤原書店から「金時鐘コレクション」全12巻が刊行中であり、金時鐘は、いま日本語で詩作している詩人のうち最も広く読まれている詩人の一人であると言ってよい。

最新の詩集は、『背中の地図』（河出書房新社、2018年）で、その主題は東日本大震災一天災であると同時に人災でもあったあの震災一である。詩人金時鐘は、齢九十を迎えてなお現実社会の今日な課題と向き合い続けており、後掲のシンポジウム記録を一読すればわかるように、まさにそのことが本シンポジウムでも登壇者の関心の集中するところとなった。

シンポジウムの構成は、以下の通りであった。

主催者挨拶 宇野田尚哉（越境文化研究イニシアティブ代表）

来賓挨拶 呉泰奎（駐大阪大韓民国総領事館総領事）

スライド上映（浅見洋子作成・上映）

基調講演「金時鐘さんがみつめてきたもの」 鶉飼哲（一橋大学特任教授）

パネルセッション「越境する言葉—金時鐘を読む—」（司会宇野田尚哉・細見和之）

「在日朝鮮人語としての日本語，その原点とゆくえ」 丁章（詩人）

「歴史を越境する詩」 宮沢剛（二松学舎大学非常勤講師）

「北米における金時鐘」 CATHERINE RYU（ミシガン州立大学准教授）

浄瑠璃による『猪飼野詩集』：「うた またひとつ」 渡部八太夫（人形浄瑠璃猿八座太夫）

金時鐘さんによる朗読とスピーチ

閉会のあいさつ 葉山郁生（大阪文学学校代表理事）

私の主催者挨拶に続いて挨拶して下さったのは、来賓の呉泰奎駐大阪大韓民国総領事館総領事である。呉総領事のご臨席・ご挨拶を賜ったことに対し、この場をかりてあらためてお礼申し上げます。このときのご挨拶は、韓国からもまた詩人金時鐘に強い関心が寄せられていることを私たちに知らしめるものであった。

それに続いて、浅見洋子氏作成の音声付きスライド（約 20 分）が上映された。詩人金時鐘の渡日から現在に至る歩みを貴重な写真と精選されたテキストと魅力的な音源でたどるこのスライド上映は、非常に好評であった。浅見洋子氏は、金時鐘研究で博士の学位を取得した学究で、「金時鐘コレクション」全 12 巻の編集委員の一人でもある。

基調講演は、鶉飼哲氏にお願いした。鶉飼氏のご専門はフランス現代思想であるが、金時鐘論の歴史を振り返ってみると、ちょうど 20 年前（1999 年）の 6 月に開催された重要なシンポジウム「言葉のある場所：『化石の夏』を読むために」（野口豊子編『金時鐘の詩：もう一つの日本語』もず工房，2000 年参照）においてすでにパネリストの一人として重要な役割を果たしておられる。その後も長らく金時鐘を丹念に読み、そして節目節目の機会に論じてこられた方であり、今回もぜひ基調講演をお願いしたいと考えた。続くパネルセッションでは、活発に詩作を展開しておられる中堅世代の在日詩人として丁章氏に、重要な金時鐘論を発表しておられる日本文学研究者として宮沢剛氏に、そして在日文学に関心を抱く北米の日本文学研究者として猪飼野を舞台とした作品（金蒼生の小説「赤い実」や宗秋月の詩作品）の英訳の業績もある CATHERINE RYU 氏に、それぞれご登壇いただいた。基調講演とパネルセッションの具体的内容については、後掲のシンポジウム記録を参照されたい。なお、今回のパネルセッションを掲載するにあたり、当日は私とともに司会をつとめてくださり発言する機会の少なかった細見和之氏にもご発言いただきたいと思い、本特集の最後に収録した論説をご寄稿いただいた。重ねてのご協力に感謝したい。

今回のシンポジウムを、普段とは異なる雰囲気のものにしてくださったのは、人形浄瑠璃猿八座太夫渡部八太夫氏による「浄瑠璃による『猪飼野詩集』：「うた またひとつ」」である。「うた またひとつ」（『猪飼野詩集』所収）というのは、「打ってやる。打ってやる。…

…」というリズムが特徴的な、単純労働が延々と続く猪飼野の町工場における生活を描いた作品であるが、渡部氏は、この金時鐘の読者には周知の作品を、みずから三味線を弾きながら語ってくださったのである。日本語への復讐として紡ぎ出されたもう一つの日本語としての金時鐘の詩作品を三味線にのせて語るというのはいったいどういうことなのか、私にはいまだにうまく説明できないのであるが、「うた またひとつ」という作品のもつ独特のリズムと浄瑠璃の語りと三味線の響きが見事に調和した素晴らしいパフォーマンスが聴衆の心を深く捉えたことは間違いなく、『猪飼野詩集』の新たな読み方が思わぬ仕方で開催されたことに聴衆はみな驚嘆したのだった。渡部氏は、基調講演やパネルセッションとはまた異なる仕方での新たな読みの可能性を開いてみせてくださったわけで、渡部氏のパフォーマンスもまた本シンポジウムの不可欠な構成要素であった。(渡部氏は、ご自身のブログで、金時鐘さんのことにも触れつつ、今回のシンポジウムに出演して下さることになった経緯について記しておられるので、参照されたい。<http://watastayu.hatenablog.com/entry/2019/05/31/000209>)。

最後に、金時鐘さんによるスピーチと詩作品の朗読があった。このときのスピーチは、「知らず知らずで、戦前回帰」と題して藤原書店の『機』2019年7月号にすでに掲載されているので、ぜひ参照されたい。朗読されたのは、「化石の夏」(『化石の夏』)、「化身」(『化石の夏』)、「雨の奥で」(『失くした季節』)、「吊い遙か」(『背中の地図』)、「2月の詩」(詩集未収録、『新潟日報』2019年2月28日)、「形そのままに」(詩集未収録、『樹林』2019年春号)、「錆びる風景」(『失くした季節』)、「羽の行方」(詩集未収録、『現代詩手帖』2018年9月号)の8作品。『背中の地図』以後の詩集未収録作品を含む、『化石の夏』(1998年)以後の作品である。この朗読は、なにものにもかえがたい充実した時間であった。

詩人が自作を朗読するとき新しい作品を取り上げるのは当然のことなのかもしれないが、長い詩歴と膨大な作品の蓄積があるにもかかわらず朗読の対象として近作を取り上げた金時鐘さんの姿勢に、聴衆は、『背中の地図』の先を見据える詩人金時鐘の健在ぶりを感じ取ったように思う。詩人の生誕90年を記念する集まりが、懐古的にならないどころか、あくまでも現下の社会を見つめ、未来を見据える機会となったのは、たんに喜ぶべきことであるばかりでなく、驚くべきことでもあるだろう。金時鐘さんの朗読を聞きながら、私はそのような感慨に打たれた。

この国際シンポジウムを結ぶ挨拶をしてくださったのは、大阪文学学校代表理事の葉山郁生氏である。そもそも今回の国際シンポジウムの当日の運営は、大阪文学学校の方々の助力なしには成り立たなかった。記して謝意を表したい。小野十三郎を初代の校長とし、金時鐘さんが長くその活動のよりどころとされ、現在は細見和之氏が校長をつとめておられる大阪文学学校は、大阪における文学運動の拠点である。(「文学運動」などという大時代的な言葉を使うと当事者の方々は違和感をお感じになるかもしれないが、外野席にいる私はそうあってほしいと勝手に願い、勝手にエールを送っている)。今回の国際シンポジウムを、アカデミアに閉じこもるかたちではなく、広く市民に開かれたかたちで開催できたのも、大阪文学学校

とのつながりによるところが大きい。その点でも感謝したい。

『朝日新聞』が事前に報道してくださったこともあり、当日は定員約 200 人の会場が満席となったのだが、じつは事前申込の段階で定員を超過してしまったため 100 人以上の方々からの参加申込をお断りせねばならなかった。致し方なかったとはいえ、当日ご来場いただけなかった方々には、この場をかりてお詫びしたい。

4

本シンポジウムのテーマ「越境する言葉」は、宇野田・細見・浅見の話し合いのなかでおのずから決まったものであるが、その際、何と何の間の越境を問題にするのか、といったことはまったく話題にのぼらなかつたと記憶する。もちろん、“朝鮮（語）と日本（語）の間”“在日コリアンと日本人の間”といった論点を設定することは難しくないし、それはそれで重要なのであるが、金時鐘の言葉のはらむ越境の可能性がそのようなわかりやすい図式に収まりきらないことは自明の前提であった。その可能性の豊かさが基調講演とパネルセッションのなかでおのずから明らかになれば、というのが、このテーマを設定した側の意図であった。丁章氏の「在日朝鮮人語としての日本語」という論点も、宮沢剛氏の「歴史を越境する詩」という論点も、CATHERINE RYU 氏の「北米における金時鐘」という論点も、いずれもそれぞれの仕方で企画者の意図を的確に踏まえてくださったものであったといえる。

金時鐘の詩業について考える際、私などはどうしても、『地平線』『新潟』『猪飼野詩集』『光州詩片』といった、すでに位置づけも評価も定まった詩集のことを想起してしまう。この点は、これらの詩集を愛読してきた私以外の金時鐘の読者の場合も同様ではないだろうか。一方、今回の国際シンポジウムでは、鶴飼哲氏も、宮沢剛氏も、金時鐘の近作を真正面から論じてくださった。このことは、今回の国際シンポジウムにとって、とりわけ重要であった。鶴飼氏は、基調講演のなかで、「私にとって今日のこの場は、過去を振り返る機会ではありません。金時鐘さんが、つねに、一言で言えば未来に向けて詩を書いてこられた、そのことに私たちがどう向き合えるかを問うべき日なのではないかと思っています」と述べておられるが、この点は企画者の側も思いを同じくするところであり、生誕 90 年・渡日 70 年の記念の集まりを、過去を振り返る機会ではなく、詩人金時鐘とともに生誕 90 年目・渡日 70 年目の現在を見つめ、未来を見据える機会とできたことを、うれしく思う。

宮沢剛氏は、パネルセッションにおけるご自身の発言のなかで、東日本大震災以後の金時鐘の詩作品における一人称複数の意味の変化に注意を促された。これはほんとうに重要な指摘であったと思う。現実の社会の抱えている問題がもはやこれまでとは質的に異なる段階に至りつつあるためそれと向きあわざるをえない「われわれ」の側も新たな共同性を築くことが求められてくるような、そのような「われわれ」の境位を、金時鐘の近作は示

しているのかもしれない。そうだとすると、金時鐘の近作を読むとは、そのような未来の共同性に向けていま・ここから「越境」する行為であるともいえるだろう。今回の国際シンポジウムで、「未来に向けて詩を書いてこられた」詩人金時鐘の健在ぶりが遺憾なく明らかとなった。次の作品、次の詩集を注視したい。